

看護闘争ニュース

NO. 148

2009年1月7日

2007 年度夜勤実態調査結果 100 床当り看護職員初めて 50 名を突破

2007 年度の調査結果の最大の特徴は、昨年に続いて 100 床当り看護職員数が増加し、はじめて 50 人を突破した（3 交替病棟 52.6 人、2 交替病棟 49.2 人、病棟全体 52.2 人）ことです。

「7 対 1」入院基本料の新設など、2006 年診療報酬改定における看護配置基準引き上げを契機に、増員が急速に進みつつある状況が、この調査結果にも表れています。

3 交替病棟の結果から 2007 年度調査結果の特徴をみると、100 床当りの看護職員数は 52.6 人（2006 年 49.7 人、2005 年 47.5 人）と、前年比で 2.9 人の増となりました。

人員増を受けて、夜勤体制も改善されています。3 人以上夜勤体制は、準夜で 60.7%（2006 年 60.5%、2005 年 53.2%）となり、特に深夜では 51.4%（2006 年 49.2%、2005 年 44.4%）と、ついに 5 割を超えました。



しかし、夜勤日数については、それほどの改善は見られません。月 8 日以内の割合は 79.0%（2006 年 78.3%、2005 年 79.2%）と、横ばいです。ただし、6 日以内の割合が若干増えたため、平均夜勤日数は 7.53 日（2006 年 7.62 日、2005 年 7.66

日）と、前年比で 0.08 日減りました。長年人員増が押さえ込まれ、過密な職場実態になっていたため、夜勤体制など勤務体制の充実の方が優先され、増員分が夜勤日数の軽減など労働条件改善まで回りきれていないということです。

3 交替病棟の結果

100 床当り看護職員数 52.6 人 前年比 2.9 人の増

3 人以上夜勤も増 深夜で 5 割を超える 51.4%
準夜は 60.7%

月 8 日以内夜勤は横ばい 21.0%が法違反の月 9 日以上
平均夜勤日数は 7.53 日 6 日以内が増え若干改善

2 交替病棟の結果

100 床当り看護職員数 49.2 人 前年比 7.3 人の増

3 人以上夜勤が 5 割を超える 54.9%

月 4 回以内夜勤はほぼ横ばい 76.7%

平均夜勤回数は 3.86 回 変わらず

外来の結果

1 人夜勤が非常に多い 交替制 32.9%、当直制 83.3%
臨時・パートの割合高い 看護職員 28.9%、補助者 68.1%

今回の実態は、298 施設 2504 職場の結果となりました。

世界保健機構（WHO）

発ガンリスクに「夜勤」を追加

WHO は、昨年 12 月に「発ガン物質の可能性」として、「夜勤」を分類に追加する決定をしたと発表。トリクロロエチレン、塩化ビニール、ポリ塩化ビフェニールなどの有害な化学物質と同様に「夜勤」もリスクに加えました。

夜勤の有害性が、さまざまな研究で明らかになっています。日本医労連の 07 年度夜勤実態調査でも、「7 対 1」などの配置基準引き上げで、若干の増員や夜勤改善がされましたが、「月 8 日以内」は依然同じ状態です。「夜勤は月の 3 分の 1 以内」の人事院判定から 49 年が経過し、「月 8 日以内」を規定した看護職員確保法から 16 年、いまだに改善がされていないばかりか、過酷さの中で自ら 2 交替を選択せざるをえない状況にまで追い込まれています。あらためて、科学的な根拠なども活用しながら夜勤制限のたたかいを強化しましょう。

国際安全衛生センター

夜勤に潜む健康障害を指摘

国立ガン研究所ジャーナル（vol.93）に発表された 2 つの調査によれば、長時間、夜勤に就く女性は乳ガンになる危険性が高い。1 つの調査では乳ガンを患う女性、患わない女性を調査した結果、女性は 3 年以上夜勤を続けると乳ガンのリスクは 60%増加すると指摘した。第 2 の調査では、30 年以上夜勤を続けた看護師の乳癌のリスクが 36%増加した。2 つの調査とも、夜間の明るい照明への暴露でメラトニンが減少し、エストロゲンが増加するため、ガンのリスクが高まると指摘した。

労働環境医学の調査では、夜勤は労働者の心臓を損傷する。調査チームは、夜勤労働者には「心室性期外収縮棘波群」と称する心臓病による死亡リスクが増加する状態が発生しやすいことを明らかにした。以前の調査でも、夜勤者は心臓病の危険が高まるとしていた。

夜のライトは乳ガン発生率が増加する

kloog 博士

もともと、科学者の間では「明かりがつかばなしの場所にいるマウスは、夜になると暗闇で眠るマウスよりもガン発生率が高い」といわれたが、同じように夜に働く看護師やスチュワーデスなども標準より 60%高い乳ガン発生率があることがわかっている。

夜の明かりと発ガン率に関するメカニズムは、まだ正確にはわかっていないが、科学者の間では「メラトニン」にそのカギがあるといわれている。メラトニンは、脳の松果体で分泌され、腫瘍の活動を抑制するホルモン分泌に関わっている。メラトニンは夜に多く分泌されるが、夜に光を浴びていると分泌量は急激に減る。パソコンや蛍光灯などの明かりも同様。

博士はこの仮説を立証するために、NASA が撮影したイスラエル上空の衛星写真を使い、夜でも明るい場所と暗い場所との乳ガンと肺ガンの発生率を調べた。その結果、肺ガン発生率には違いがなく、乳ガン発生率では違いが明らかになった。最も暗い場所に較べると、夜の通常レベルの明かりがある場所では、乳ガン発生率が 37%高くなり、さらに夜でも明るい場所ではさらに 27%発生率が高いことが明らかになっています。